

「東アジア人文研究討論会(上海)派遣参加報告書」

京都大学文学部・研究科博士課程三年 黄詩琦

①学習成果

3月18日から23日までの間に、上海の復旦大学文史研究院において第七回東アジア人文研究博士学生ワークショップに参加した。私がこのワークショップに参加したことは第三回目である。このワークショップは「東アジア人文研究」という比較的に広いテーマと設定しているので、参加する学生たちが東アジアという地域の範囲内、古代から現代までの歴史・文学・地理・社会などの分野の様々な発表テーマを提供した。このため、このワークショップは一般的な学術発表と異なり、発表者が全く異なる分野の研究者に発表する能力を要する。このワークショップに参加することによって、これからも自分の研究を異なる関心を持つ研究者によりよく説明できるように頑張りたいとなった。

②海外での経験

もともと中国人であるので、海外といえないが、今回行った復旦大学や浙江省についで、あまりに接触した大学や地域ではないので、特にその大学の学風や浙江省の歴史・文化といった面で、本当に新しい経験や勉強になった。復旦大学のキャンパスは広くて綺麗であり、学生たちも生き生きしている。歴史研究科においても様々な講座や講演を行っているようである。

③プログラム内容

今回のワークショップに参加した学生は、復旦大学21名(主催校)、香港城市大学8名、そして京都大学14名の計43名を数えた。19日は開幕式に引き続き、三校が合同で調査を進めてきた京都大学所蔵の「苗蛮図」について三校の学生たちが報告を行い、それに対して復旦大学・葛兆光教授による広い視野に立った講評がなされた。19日午後から20日にかけては、「早期中国の歴史・文献・言語の考証」「分裂時代の宗教と文学」「唐代の宗教と文学」「宋遼金時代の社会集団と思想」「明清時代と東アジア海域」「芸術史の集中討議: 図像と歴史研究」「思想史の集中討議: 東アジア世界の近代的転換」「現代に向かう東アジア世界」「東アジア社会と都市研究」の9セッションが設定され、各大学の学生が司会進行を務める中、中国語・英語を駆使した研究発表(時間20分)が展開された。また全セッションで学生らが講評の任を担い、発表のまとめを行いながら的確な問いを提起したことで、所定の時間を最大限に使った活発な意見交換が繰り広げられ、議論し尽くせなかった問題は、三校の教員5名も参加した最後の総合討論、さらには夜の懇親会の場に持ち越された。

21日からは杭州への実地見学に行った。21日の早朝に上海を出発し、午後は良渚遺跡を参観した。良渚遺跡博物院に、五千年前の良渚文化および墓室に埋蔵された多種多様な玉器の出土品の状況を、博物院スタッフから説明くれた。実際の宮殿の遺構にも踏み入れた。

22日は浙江省博物館にて浙江省の歴史をたどり、昼食には法喜寺で供される素食(精進料理)を味わった。また龍井茶の茶畑が広がる龍井村に行き、中国のお茶文化を体験した。最後には杭州の名刹たる靈隱寺を参拝した。

① 進路への影響について

今回のワークショップに参加することを通して、今現在中国と香港の青年研究者たちの状況や研究関心がだんだんわかるようになった。それにより、今日の東アジア社会における人文学研究の意義を理解し、自分の問題意識と視野を広げようとすることを期待している。